

東日本大震災被災地支援活動ボランティアの報告

●3月19日(月)

午後2時に連盟事務所の車を借りて、溝上哲朗牧師(久留米荒木教会)と藤寿牧師(那珂川伝道所)の2名で、岩手県遠野市のボランティアセンターへ出発する。東北自動車道を北上するも、途中で災害本復旧工事が行われており、2か所で1時間と、30分の渋滞に巻き込まれる。9時間かけて遠野ボランティアセンターに到着したが、到着までの1時間は吹雪の中、視界が2～3mという中を走行する。



■写真 01、

●3月20日(火)

朝7時過ぎに、遠野まごころネットへ行き、ボランティア活動の参加手続きを行う。事前に必要なものを確認していたが、用意していなかったものがありました。瓦礫の除去作業を行うには、長靴の安全靴(つま先に鉄板が入ったもの)と、踏抜き防止インソール(安全靴に敷く中敷き)を用意していたのですが、作業終了後には、履き替えることになるので、普通の靴も用意しておく必要がありました。しかし、それを知らずに長靴の安全靴を入れて行ったために、帰りのバスは、靴を脱いでバスに乗り込むことになりました。また、軍手を用意していきましたが、合わせてゴム手袋もその上からはめる必要があったので、被災地に向かう途中のトイレ休憩の時に、慌ててドラッグストアに駆け込んで購入しました。それが用意できない場合には、作業にはあたることができないと言われました。事前確認の重要性を痛感させられました。

この日は、100名ほどのボランティアが参加しました。京都から一人で参加した19歳の女子大生もいました。

■写真 02、



遠野市からマイクロバスにのって、釜石市を通過して大槌町に向かいましたが、バスの中から被災地の写真を撮って頂いていいと言われました。10月に伺った時には、撮影しないように言われたのに、この変更は、ボランティアが少なくなっているの、ボランティアに来た方々に被災地の写真を撮って頂いて、地元で知り合いなどに被災地の現状についてお話しして欲しいと言われました。

釜石市内は、11月に来た時には、被災したビルがそのままの状態でしたが、今回はその中の一部で解体されて更地になっているところも何箇所も見受けられました。そして、大槌町に向かう途中で、今回新しくコンクリートの瓦礫の山ができあがっていました。

■写真 03、04、





大槌町は、津波に被害にあった沿岸部地域は、瓦礫が取り除かれたままの状態になっていました。そして、大型のテントの中で復興食堂が営業をしていました。昼食は、その復興食堂の「がつつら丼」を配達してもらい、美味しく頂きました。

■写真 05、06、07



大槌町の赤浜地区で、津波の被害を受けた地区の木片やコンクリート片などの瓦礫を取り除く作業を午前2時間、午後2時間行いました。

■写真 08



2階建ての仮設商店街2棟が、大槌町に建設されて営業されていました。商店や、パン屋さん、床屋、そして居酒屋もありました。遠野まごころネットの休憩所も設けてあり、交流の場になっているようです。

■写真 09



● 3月21日（水）

午前9時には、出発したのですが、東北自動車道はやはり途中で渋滞に巻き込まれた。仙台に入る手前で30分、福島県の二本松インターの手前から2時間の渋滞でした。それで二本松インターで一般道におりて郡山市へと向かいましたが、多くの車が走っていました。郡山市内においても自動車の量も多く、市街地も普通に歩いておられる方が多くおられました。

■写真 10、



夕方までに郡山コスモス通り教会に到着しました。連盟の災害対策本部が制作した歌集「心の歌、思い出の歌」500部が届いていました。今後、岩手県、宮城県、福島県の教会において仮設住宅などを訪問しての歌声喫茶を行う時に、用いられることでしょう。この歌集の表紙は、郡山コスモス通り教会の鈴木結生くん（小学4年生）が描いてくれました。

■写真 11



その夜は祈祷会に出席させて頂きました。夜は、須賀川シオンの丘（日本イエス・キリスト教団の宿泊施設）に宿泊しました。

● 3月22日（木）

郡山コスモス通り教会に集合した後、支援物資などを詰め込んで車に分乗して緑ヶ丘仮設住宅へ行きました。ここの仮設住宅は、福島第一原子力発電所の近隣にある富岡町の住民の方々が集団移転して住んでおられます。仮設住宅の集会所に物資を運び込み、お茶会の白玉団子の準備を済ませてから、歌う会を行いました。司会とギター伴奏を野中宏樹牧師が担当して下さり、鳥栖教会の姉妹がキーボードを福島まで持参して伴奏して下さい、原田和代姉（福岡教会）以下、鈴木牧人牧師（郡山コスモス通り教会）、藤牧師（那珂川伝道所）、溝上牧師（久留米荒木教会）、興津兄（福岡城西教会）、そして大宮教会の永町牧師も一緒になって歌声に加わって頂きました。その間、金子千嘉世牧師はハンドマッサージを行い、郡山コスモス通り教会の信徒の方がマッサージを住民の方々にしていました。

■写真 12



歌は、童謡、唱歌、そして昭和歌謡などが歌われました。みなさん、笑い声やおしゃべりなどを交えて、楽しく歌いました。そして、野中牧師が前回伺った時に教えて頂いた富岡町の町民歌と一緒に歌ったのですが、その2番の歌詞に出てくる、「新しい科学の技術（わざ）に、故郷の未来をひらく」という歌詞を、住民の方が、いまじゃ「未来を閉ざすになっている」と、かつては原子力発電所が建設されたことを喜んだけれども、今ではその原子力発電所の放射能漏れ事故のため、自分たちの未来が閉ざされている無念さを訴えかけられました。

郡山コスモス通り教会に戻って、昼食を済ませた後、南相馬市へと視察に伺いました。南相馬市は原発から30キロに位置しますが、海岸のそばでは津波のために広範囲の土地が濁流に流された後になっていました。そして、南相馬市で1週間ボランティア活動をされた作業療法士の方にお話を伺いましたが、子どもの半数が転校していることや、生きていてもしょうがないと悔やまれる住民の方のお話を伺いました。被曝のこと

を心配しつつも、その町に住み続けるしかない方々の複雑な心境の一部を伺った気がしました。福島県外に転出された方は、1年前と比べて6万人ですが、200万人ほどおられる福島県の住民の3%の方々です。逆を言えば、97%の方々が、約200万人弱の方々不安や葛藤を覚えつつ、福島県において生活されています。他の近隣県よりも一桁多い被曝量の数値を見ながらの生活は、いまだに被災の渦中にあることを考えさせられました。

■写真 13



大宮教会の永町牧師は、南相馬市の視察の後、帰宅されたのですが、夜間にも関わらず途中の東北自動車道で2時間の渋滞に巻き込まれたそうです。今年の3月～12月にかけて、災害本復旧工事が東北自動車道で行われていますので、前もって工事箇所や渋滞箇所を調べておくことと、1時間から2時間ぐらいは渋滞に巻き込まれることを計算して予定を組まれることをおすすめします。